

---

# 星降る聖夜に、花束を

斎藤一樹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

星降る聖夜に、花束を

### 【Nコード】

N8210Z

### 【作者名】

斎藤一樹

### 【あらすじ】

斎藤一樹のクリスマス企画！

主人公がクリスマスイブの日に死ぬところから始まる、ラブストーリーです。

(前書き)

すみません、クリスマスに間に合いませんでした……orz

死ぬ間際、もし一つだけ願いが叶うのなら。

あなたは、何を願いますか？

XXXXX年、12月24日。一人の少年が、交通事故で救急車に運ばれた。交差点で、信号を無視したトラックに撥ねられて。

12/24 13:30

どことも知れない空間の中、少年は目を醒ます。

「……ここは？」

彼の名は中澤亮介。なかざわひろよし今から一時間ほど前に死亡した少年だ。

「ここは、狭間だよ。生ける者の住む世界と、死んだものの住む世界との、ね」

何処からか、その問いに答えが返って来た。

何処から聞こえて来たのか、と亮介は辺りを見渡すが、誰も見当

たらない。「私はここだ！」

再び声が響き、亮介が咄嗟に後ろを振り向くと、一人の男性が立っていた。

「どこから現れた!？」

ついさっきまで何も無かったのに、だ。そして現れた当人（人？）は、

「そんな事はどうでもいい！」

中々に理不尽な事を言った。

「じゃあ、質問を変えよう。あんたは誰だ？」

少し語調を強くして、亮介が言った。

12 / 24 14 : 00

「……………で？アンタが神様とやらで、今いるこの場所が死語の世界との間にある所だ、って事は分かったが」

「何か疑問があるのか？」

「強いて言えば、今のこの状況が」

そう。たかが一人の人間の死で、わざわざ「神」が出てくる、というのはおかしい。だとすれば、それだけの理由が何かしら、ある

筈なのだ。

勿論、今日の前にいる男が本当に「神」と呼ばれる存在であると仮定しての話だが。

「神」は口を開く。

「なに、クリスマス・イブというこの日に運悪く死んでしまった君に、神たる私からのささやかなプレゼントを渡しに、ね」

ウインクしながら、「神」を名乗る男はそう言った。

12/24 14:30

「うーん、どの服を着て行こうかな……？」

一人の少女が、自室の鏡の前で迷っていた。

ベッドの上には、却下された洋服が無造作に幾つも置かれている。

「初めてのデートなんだし、お洒落にキメたいよねえー」

少女は、名を篠原美咲しのはらみずきといった。

12/24 15:00

「まあつまるところ、死ぬ前に一つだけ願いを叶えてくれる、と」

「そついで事」

「神」が頷く。

「なら、生き返るって言うのは？」

期待に満ちた顔で、亮介が言った。

「それは無理だな」

至極あっさりと言いつた。

「何でさ？」

「いくら私とて、死んだ命を蘇らせることは叶わないのだ。それは私の管轄ではない。ついでに言えば、願い事の回数を増やす、というも駄目だ」

釘を刺すように、「神」は言った。

「理由は？」

「私が面倒臭い」

「ぶつちやけ過ぎだろう!？」

1 2 / 2 4    1 5 : 3 0

服を選んでいた少女は、やっと選び終えた。

「よし、この服にしよう!」

その顔はどこか晴々としていた。

数分後。着替えを終えた少女の携帯電話が、着信音を鳴らした。

その内容を聞き、彼女は崩れ落ちた。

「…そんな。亮介君が……」

12 / 24 16 : 00

「で、願いは決まったか？」

「神」は急かすのでもなく、世間話でもするような気軽さで問う。

「なあ、俺って今、死んでるんだよな？」

「いや、正確には意識不明の重体、というやつだな。ただし、眼を覚ますことは無いが」

「…そつか……。その様子、見ることして出来るのか？」

「それは 願い事 か？」

「違う、 お願い だ」

はっきりと、亮介は言った。

12 / 24 16 : 30

美咲は、亮介が搬送された病院にいた。手術は既に終わり、亮介は病室へと移されていた。

「……………亮介君……………」

少女は神に祈る。もう一度、大好きな彼に会えるように、と。

12/24 17:00

亮介達が、病院に到着した。

「まさか自分が寝ているところを眺めることになるとはね……………」

病室に入る前に、亮介は呟いた。そして、ドアを開けて入ろうとすると、啜り泣く声が聞こえた。思わず、手が止まる。

「どうした？入らないのかい？」

不思議そうに「神」が問う。

「ああ、……………そうだな」

少し躊躇ってから、再びドアノブに手を掛けた。

「……………君は何をしているんだい？」

心底怪訝そうな顔をして「神」が言った。

「へ？」

「私たちには実体が無いんだよ？ドアを開けられる訳がないだろう？」

確かに。

「じゃあどうするんだ？」

「壁を抜ければいいだろうに」

成る程。

「でもそれは何となく、心理的に抵抗が……」

感覚的には、壁に向かって自分からぶつかりに行くようなものだ。

「ほら、覚悟決めろ」

「うわ、ちょ、押すな！」

ドン、と後ろから突き飛ばされた。そしてそのまま、病室へと飛び込む。

「……み、美咲!？」

そこには、付き合い始めて未だ間もない恋人の、篠原美咲がいた。

「なあ、普通の人には俺達って見えないんだよね？」

「ああ、たまに霊感が強い人とかは見えるけどな」

成る程な。……よし。

「決まったよ。願い事」

「ほづ。言ってみる」

「暫く、実体がほしい。一時間ぐらい、いや三十分でもいい」

「ふん。そう来たか……いいだろう。その願い、叶えてやる」

言つと、何やら怪しげな手つきを仕出した。

「あ、ちょっと待ってくれ」

慌てて呼び止める。

「どうした？」

「一つ用意してもらいたい物があるんだ」

12 / 24 18 : 00

もう、美咲が来てから一時間と三十分が経過した。しかし、一向に亮介は眼を覚まそうとしない。

「ねえ……、起きてよ……」

少女の祈りは、届かない。

「…飲み物買って来よ……」

美咲は呟くと椅子から立ち上がり、病室を出て、自動販売機の置かれている休憩所へと向かった。

そして、それを二つの人影が覗いていたことを彼女は知らない。

美咲は、自動販売機の側にあるベンチでジュースを飲んでいた。  
そこに、

「やあ、美咲。メリー・クリスマス」

亮介が歩み寄る。

「り、亮介君！？ どうしてここにいるの！？」 驚いたように美咲が言う。その後、亮介に「静かに！」と囁かれ、我に返る。

「でも亮介君、病室のベッドで寝てた、ううん、そもそも意識不明だった筈なのに、何で？」

「ちょっとズルをしたんだよ。それで、君にお別れを言いに来たんだ」

どこか淋しげに笑いながら、亮介は言った。

お別れ、という言葉に、美咲の足が震え出す。

「もう、居なくなっちゃうの?」

「…ああ」

「もう、会えないんだよね?」

「…ああ」

「…もう二度と、一緒に笑ったり、遊んだり、お喋りしたり……出  
来ない、よね?」

「…ああ」

美咲の声は、涙声になっていた。眼からは涙が止まらない。亮介は、例によって悲しげな微笑み。しかし、その眼は涙に滲んでいた。

美咲はとうとう言葉が出てこなくなったのか、啜り泣き始めた。  
亮介はそれを見て、何も言わずに震える美咲の肩を、背中を、抱き  
しめた。

俺は今、ここにいます。紛い物の身体でも、確かに今ここに存在  
していると、そう訴えるかのように。

亮介の頭の中に、「あと三分でタイムリミットだ」という声が響  
いた。名残惜しいが、そろそろ最期の言葉を伝える為、美咲を抱き  
しめていた腕を解く。

そして、美咲に顔を真っすぐに向けて、眼を合わせて、言う。

「美咲、ごめんね。そろそろ、お別れの時間みたいだ」

「……逝かないで、って言っても、ダメなんだよね？」

「……うん。どうしようもないみたいだ」

「……そう、じゃあ、仕方がないね……」

「……ああ、そうだ。君にクリスマスプレゼントがあっただ」

そう言うと、亮介はどこから綺麗な花束を取り出した。

「メリークリスマス、美咲」

一度は止まっていた美咲の涙は、もう一度溢れ出した。最期だから、亮介の顔を見ていたのに。視界は滲んで、よく見えない。

「泣かないで、美咲。泣き顔も可愛いけど、俺が一番好きなのは美咲の笑顔なんだから」

「……うん」

「ほら、涙を拭いて、顔を上げて。最期は、俺の大好きな笑顔で見送ってくれよ」

「……うん」

「……俺が死んだら、俺の事は忘れて、新しい好きな人を探しなよ」

「…………え？」

「そうして、幸せになってくれ」

「……………」

美咲は、涙が止まらなかった。

次第に、亮介の身体は粒子になって、溶けるように薄くなっていった。

「お別れだよ、美咲」

その言葉を聞いて、美咲は亮介の身体を抱きしめた。その温もりを、離さないようにと。しかしそれも虚しく、亮介は消えてゆく。

「ああそつだ、最期に大切な事を言い忘れてた」

抱きしめられたまま、亮介は消えそうな声で呟いた。

世界で一番誰よりも、君の事を愛してるよ、美咲……

その声が聞こえた瞬間、美咲の腕の中の温もりは完全に消え失せた。

12 / 24 18 : 30

「……………」

亮介の寝ている病室で、美咲は眼を覚ました。

「……夢？」

美咲は、周りを見渡す。と、

「あの花束は……！ ……夢、じゃなかったんだ……！」

サイドテーブルの上には、亮介のくれた花束が置いてあった。

「……！！ ……ということは、まさか……」

心電図は……止まっていた。

美咲の肩が、震え出した。彼女は黙って、ナースコールのボタンを押した。

12 / 24 19 : 00

心のどこかに、ぼっかりと大きな穴が空いたような感覚だった。

「……これからどうしよう？」

亮介が寝かされている病室のすぐ外の廊下で、美咲は一人佇む。

窓の外には、満天の星空。

眼を閉じれば、亮介との短くも楽しかった日々が脳裏を過ぎる。楽しいことだけじゃなかった。喧嘩もした。嫌な思いもある。そ

れでも、そんな思い出すら愛おしく思える。

そうだ。これからの事なんて、これから決めていけばいいんだ。  
君の幸せを見つけると、彼も言っていた。

そう、ふと思った。

窓の外の星空から眼を離し、踵を返して歩き出す。

窓の外には、変わらず煌めく星空が映っていた。

星降る聖夜に、花束を。

(後書き)

目茶苦茶難産でした。

プロットだけで3、4回変更になりました。書き始めてからも修正を繰り返した結果、とうとう間に合いませんでした……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8210z/>

---

星降る聖夜に、花束を

2011年12月26日00時49分発行